

エッセイ

新橋界隈の変遷⑤

瀬崎 明（会員）

コロナ禍が長年続いたことで社会の在り方も大きく影響を受けた。私などは罹患を恐れ外出も控えることが多く、友人の逝去にすら義理を欠いてしまう状況が続いた。

飲食店などは来店者の減少やコロナ対策での費用増大で大きな痛手を受け、事業の継続を諦めて閉店したところも多い。国際善隣会館の賃貸者「魚のまんま」は協会の収益の柱であるのだが、幸いにして顧客を取り戻している様子は嬉しいことである。

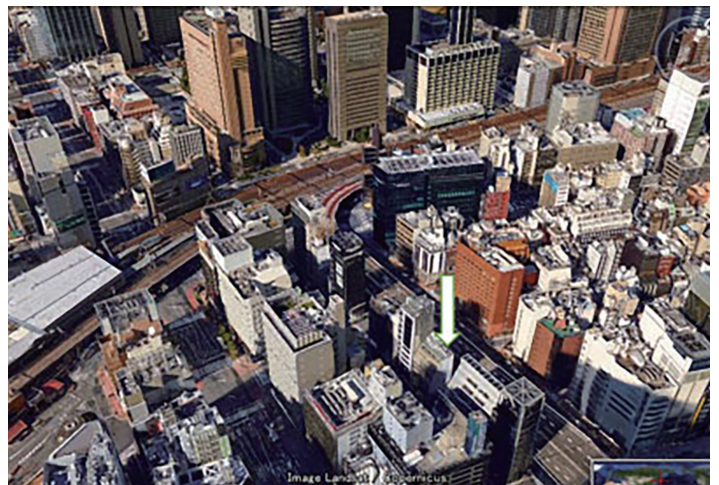
協会から指呼の間にある天婦羅屋は地名のもとである新橋のたもとにあった。60年前の東京オリンピックで川も埋め立てられ交差点脇の公園に

親柱が残るだけとなったが、その傍にあり八島継男顧問に連れられて行き美味しい天丼を食べた。ここは渋沢栄一氏の子孫が経営していて名刺もいただいた。店舗ビルを新築するとの話であったがその後のコロナ流行でどうなったのか、近いところだが、駅側でないためコロナ自粛を身にかけてまだ訪れる機会がない。会館周辺もあちらこちらで変化が生じている。周辺のビルも新築されたところが多くなった。協会の銀座側にある高速道路は60年前にオリンピックに間に合わせるため江戸時代の水路を埋めて建造されていて、増加する交通量もあって沈下が大きい。所有者の東

京都市は2度目のオリンピックで整備された道路網の完備で旧高速道路の利便性も低下したことで廃止も検討している様子である。

下の写真のほぼ中央の矢印の先が国際善隣会館であるが、周辺のビルも新しいものが増えてJR東海道線を挟んで上の日比谷側は第一ホテル、帝国ホテルなどの大敷地を持つ地主が多く、高層ビル群となっている。下の新橋側は新橋駅北口側の新橋ビルは建て替えが計画されているが、南口側の新橋駅前ビル1号館および2号館は10年前と変わらず、いずれも建て替えるの気配が見えない。

協会から虎ノ門通りを挟んだ小規模ビルの密集地は火事騒ぎもあったが相変わらず小規模店舗が林立している。



鉄道発祥の地である旧新橋駅（汐留）は操車場などの広大な地域を利用して電通ビルなどの高層ビルが立ち並んでいるが、それ以外は新橋から銀座にかけて小規模の家屋が密集している。

（①～④は2019年10月号、11月号、2020年1月号、11月号に掲載）